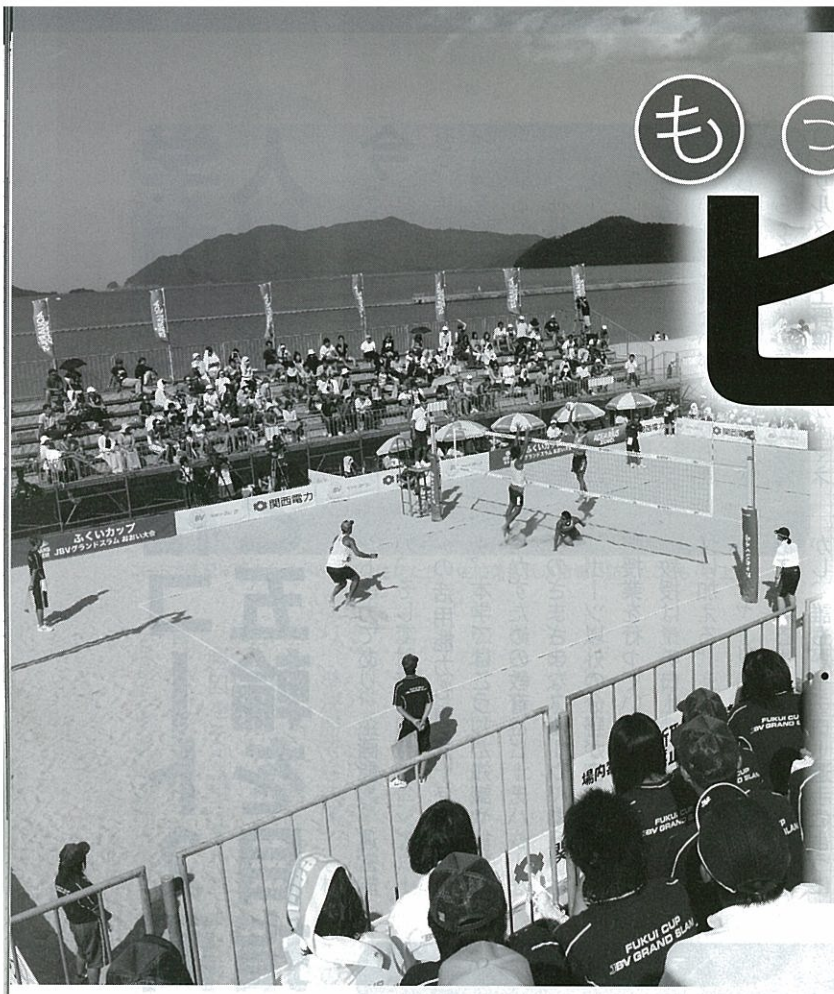

もっともっとビーチバレー!!

ビーチバレーに急接近!
BEACH VOLLEYBALL

～ローティーンからのビーチバレ

浅尾美和のブレークもあり、にわかに高まるビーチ人気。以前は閑散としていたコートが、土日ともなると場所取りが激しくて…なんていう声も聞こえてくる。砂の上の難しさはあるとはいえ、手軽に楽しめるのもビーチの魅力。今月は、ビーチへの取り組みアレコレに迫ります。

ビーチ文化の成熟目指し、奮闘する日本ビーチ文化振興協会

「人と自然が共存する新たなビーチ文化を創造し、多様な主体の協働による海辺作り推進」を理念とする日本ビーチ文化振興協会。その理事長を務める瀬戸山正二氏（96アトランタ五輪ビーチ出場）の脳裏には、今なお強く焼き付くシーンがある。それは大学卒業後に訪れたロサンゼルス（アメリカ）の海辺の風景だ。

「もう本当に至るところにビーチバレーのコートが広がる。何だコレは！」

それは強烈なインパクトだった。以来、ビーチバレーのプロに転向することになるのだが、それは今回省略する。日本のビーチ選手として先陣を切った氏は03年、現職に就任。しかし、当時はさんたんたる状況だった。

「ビーチバレーの試合など年に数試合しかない。ある大会などでは、最盛期には3000万円ほどあった予算がその半分程度まで絞られている始末」

何とかしなければ…。ここから氏の奔走が始まる。大会冠スポンサーのもとに訪れてはさまざまな交渉をし、ツアー隆盛に尽力。一方では、ビーチ文化活性化のために国を動かすお役所回りを繰り返す。

「日本では海開きに始まって、8月31日までは海水浴客でビーチに人が集まりますが、9月に入れば、翌年のシーズンまで、それは閑散としたもの。一部、マリンスポーツを楽しむ人が訪れる程度です。

ところが海外は全く違う。とりわけビーチバレーで列強に位置する国では、多くの人が年間を通してビーチに親しみ、そして癒やされる。それは何よりも、海外にはそうした（人々が訪れたいと思う）環境があるからです」

元来、日本という国の海辺に対する考え方は、「防災」という面が強かった。波よけにテトラポッドを積み上げ、堤防を造り…。

「僕自身ビーチ出身でしたから、海辺にビーチコートをという思いはありましたが、それでは国も首を縦に振ってくれない。ですから、もっと大きな視点で海辺の活用という方向で話を進め、それからですね、次第に耳を傾けてもらえるようになったのは」

04年に同協会が発足して今年で5年。今ではその考えに賛同する自治体も増え、例えば神奈川では現在、4つの海辺にビーチコートが常備されるまでになった。

「日本のスポーツ環境は、中へ、中へと向く傾向があります。運動したければ総合運動公園で、あるいは体育館でと。僕が子どものころは違いました。そこらの公園や草むらで野球もサッカーもやった。それが当たり前だった。でも今は、スポーツとなるとテレビやマンガ、ゲームの中で観戦するもの、そんな感覚の子供が多いような気がします。ビーチバレーに限らず、やりたくなったら、すぐそこにやる場所がある、そんな環境作りが大切です」

現在、ビーチは、バレーのみならずサッカーやテニス、相撲や綱引きなど、多くのイベントが行われる。

「ただ、イベントがなければ人が集まらない。それでは本当のビーチ文化とは言えません。軽い気持ちでビーチを訪れる、そのためにはまだまだやることはたくさんあります」

今、氏の構想の一つにはビーチライブラリーがあるという。欧米でよく見かけるシーンだが、浜辺に寝転び読書にふける。

子供が砂遊びし、若者はバレーやサッカーに興じ、そして年配者は読書を楽しむ。日本という土地柄、時期によっては難しい話かもしれないが、そんなビーチ文化が成熟したら、我々の人間性ももっと豊かになるに違いない。

ビーチ文化を熱く語る瀬戸山正二氏